等により、調査の依頼を行ったところ、5 ヶ所のダルクから口頭で承諾が得られた。これら5ヶ所のダルクの特徴としては、以下のものが挙げられる。

A施設：定員8名　公的助成金は受けていない。
　　スタッフ2名　責任者1名

B施設：定員8名　公的助成金は受けていない。
　　スタッフ1名　責任者1名

C施設：福祉ホームA　定員10名　助成金で運営
　　スタッフ3名　責任者1名

D施設：定員20名の施設、公的助成金受けておらず
　　自力運営　スタッフ2名　責任者1名

E施設：定員5名のグループホーム　小規模作業所
　　を併設　スタッフ2名　責任者1名

2．データの収集状況

対象となった5つのダルクのうち、Aダルク，Bダルクに対しては、研究者が直接出向き、調査を実施した。Cダルク、Dダルクについては、調査を開始する前に、それぞれのダルクに出向き、責任者に調査の方法を説明し、調査を依頼した。Eダルクについては、Eダルクを支援する会の委員の一人に、E-mail や電話などで調査の説明を行い、調査協力をお願いした。しかし、実施はダルクの職員がおこなった。その結果、平成17年7月から平成18年2月までの間に25名のダルク利用者に、ダルク入所時の面接調査を実施した。(表1参照)

対象者25名のうち、平成18年2月28日現在、ダルク滞在期間が6ヶ月以上の者は6名であった。このうち2名のものは、滞在期間6ヶ月過ぎた時点で自己都合により退所している。C ダルク,D ダルク E ダルクでは、入寮中の調査が定期的に行われていなかったため、2 月末時点の対象者のダルク利用状況を確認するために、書面や口頭により調査を担当したダルク職員から直接情報を得て、対象のダルク利用状況を把握した。

3．対象の特徴

1）対象者の背景

対象者 25 名の薬物乱用にかかわる生活背景などについて表2にまとめた。(表2参照) 主な特徴として以下の内容が挙げられる。

(1)対象者の年齢の平均は33.89歳であった。

(2)最終学歴は、中卒及び高校中退のものがほぼ半数を占めていた。(図1)

(3)乱用開始薬物としては、有機溶剤が最も多く 13 名であり、その他は、覚醒剤4名、大麻5名、アルコール5名であった。

(4)乱用開始年齢は、有機溶剤から乱用を開始した12名は13歳～17歳であった。

(5)ダルク入所中の生活費は、13 名が生活保護を受けており、残り12名が親の負担している。

(6) 暴力団との関係は乱用前 9 名、関係は無し 10 名であった。(図2)

(7) 非行グループとの関係は、乱用前よりあったものが68%を占めている。(図3)

(8) 乱用者とのつき合いは乱用前からあるものが60%を占めている。(図4)

(9) 初めての飲酒や喫煙は中学生時代が多くを占めている。(図5、図6)

(10) 煙草を常用するようになったのは中学校時代が60%を占めていた。(図7)

(11)補導歴は、「乱用前にあり」が40%であった。(図8)

(12)補導歴は、「乱用後にあり」と「逮捕歴なし」が同数であった。(図9)

2）乱用薬物について

使用した薬物とそれぞれの乱用開始年齢を表3にまとめた。乱用薬物として最も多かったものは覚せい剤であった。次いで、有機溶剤と大麻がであった。これらに続いて、アルコールの乱用が多かった。また、乱用の動機で最も多いものは、「好奇心」であり、12名で50%である。(図10)

3）依存薬物

21名が、主に依存している薬物に、覚せい剤を挙げていた。残りはアルコールや睡眠薬、シンナーを主な依存薬物としてにあげていた。

4．ダルクの利用状況

25名のダルクの滞在期間と2月末の時点での所在を表4にまとめた。調査を開始した7月から現在に至るまでダルクに滞在しているものが2名あった。8月から現在までの間滞在しているものは、2 名である。

ダルク退所後の所在が不明な者は9名である。このうちダルク滞在期間が1ヶ月未満の者は、6 名であった。またこの 6 名のうち、4 名の者は、ダルクの利用料の支払は、親が行っていた。このほか、退所後に不明となっている9名のうち4名は、過去に

他のダルクでの入所経験を持っていた。

5．ダルク利用者の調査

1）ダルク入所中の調査

入寮中は、ほぼ1ヶ月に1回のペースで、毎回同じ内容の調査票で、本人直筆記入による調査を行った。その結果、平成18年の2月末現在、入所期間が5ヶ月以上の対象者は6名となった。

2）ダルク入所における生活の満足度

ダルク入寮中の生活に対する主観的な満足度をWHOのQOL26を用いて測定した。入所期間が6ヶ月以上の者6名のQOLの得点を、入所時と、3ヶ月後、5ヶ月の3グループ間を比較したが、有意な差は認められなかった。各個人の入所期間中のQOLの得点は、利用期間の延長に伴って上昇しているものや逆に入所期間の延長に伴って下降しているものなど様々である。(図11～16参照)

D．考察

1．当事者活動の追跡調査における課題

今回の調査では、ダルクにおける薬物依存症者の回復に関わる変化として考えられる項目を、測定尺度を用いて追跡調査を行っている。平成17年7月より調査を開始したところ、中途退所者が多く、ダルク利用による変化についての、解析が実施できるだけのデータを確保することができなかった。中途退所者の9名のうち6名の者は、入所後1ヶ月程度で退所している。退所理由は、自己都合による退所の申し出の他に、無断でダルクを抜け出し、自宅に戻ったケースなどである。退所した者については、その所在や所後に薬物を再使用しているかどうかは、情報がなく不明である。特に今回の調査の対象ダルクの半数は、公的な助成を受けておらず、その運営は規定があるわけでなく、利用者が無断で退所した場合、その後の行方について追跡し、確認を行うことをどこからも求められているわけではない。

ダルク退所者の多くは1ヶ月未満で退所しており、ダルクでの集団生活への適応ができていなかったこと考えられる。退所が1ヶ月未満の者の約7割は、ダルクの利用料の支払いを親が行っており、家族との関係が比較的良好に保たれているものと考えられる。そのことから、これらの多くは、ダルク退所後自宅や家族の下に戻っていることが考えられるが、その後、他のダルクを利用しているのか、再使用で逮捕されているのか、入院しているのかは、不明である。

平成16年度、森田らが行ったダルク利用者に対する調査の中で、ダルク利用者の多くは、複数のダルクを移動し、回復に向かう者も多いようである。

次年度、ダルク利用者の予後調査を実施していくにあたっては、本人についての情報を本人だけでなく、本人を取り巻く家族やその他の関係者からも得ることが必要になると考えられる。ダルク入寮中の調査については、同意書をとって実施しているが、退所後の調査を行うにあたっては、自宅への連絡など、扱う個人情報の量が増えることなどから、改めて調査への協力を依頼し同意を得ることが必要となる。

2．ダルクの利用期間の特徴

調査の対象者は25名で、平均年齢が34歳である。このうちほぼ半数の13名が生活保護を受けおり、年齢が高くなるほど生活保護費を受けるものが多い。逆に年齢が若い者は、ダルク利用料の支払いを親が行っている場合が多く、家族とのつながりが保たれていることが伺える。ところが、このことは、ダルク利用により薬物を止めるうえにおいては、プラスの面が多いわけではないと思われる。ダルク入所後1ヶ月以内に退所したほとんどの者は、ダルクの利用料を親が支払っており、ダルクの利用の継続に、家族の存在が関係することが推察される。

3．薬物乱用にかかわる対象の背景

対象となった今回の集団の特徴として、薬物乱用以前から薬物乱用者との付合いや、非行集団との付合いが多いことの他、初めて煙草を吸った時期、煙草の常用が始まった時期などが中学校時代になっており、中学生の時期に逸脱集団とのかかわりや逸脱行為が始まったと考えられる。また、この集団の乱用開始の時期として多かったのは、13歳から17歳の年齢であり、中学生時代の交友関係が薬物乱用とに深いかかわりがあることが伺われる。これらの対象の最終学歴は、中学卒業から高校中退に集中しており、飲酒、喫煙、薬物乱用が一連の行為として、非行集団の中で行われ、この時期の補導などにより、将来の学習が中断された者が多いと考えられる。その結果、最終学歴が中学卒業や高校中退に収集していると思われる。そのため、薬物依存症からの回復

にあたっては、この時期の発達課題を取り組むことも必要な作業であると思われる。

4．ダルク利用者の変化

25名中6名のデータをダルク滞在期間3ヶ月、と6ヶ月で入所時と比較したが、いずれの項目も有意差は認められなかった。

今回、利用者の生活の満足度を測定するためにWHOのQOL26を採用した。この尺度は、個人の主観的な満足度を測定する上で有効な尺度として広く使用されている。このQOL尺度の得点を見ると、ダルク入所期間の延長に伴い増加しているものや逆に低下しているものがある。QOLの得点が低下していくものは、利用期間の延長に伴い、ダルクの生活に対する不満が増加していると考えられ、このことがダルクを退所していくことに関連するのではないかと思われる。今後データを増やすことによって、ダルクの退所とQOLの得点との関連を分析していくことが重要であると思われる。

E．結論

5ヶ所のダルクで25名の調査対象者の協力を得て調査を行ったところ、平成17年7月から平成18年2月までの期間に、ダルクの滞在期間が6ヶ月以上のものは6名であった。他は、ダルクを早期に退所する者が多い。特に、ダルク入所1ヶ月でダルクを退所する者が多く、これらの多くは、ダルクの利用料を親が払っているものであった。このことから、ダルクの利用と、家族との関係がダルクの利用の継続に影響を与えるものがあることが推察される。

今回の調査では、対象の数が少なく、ダルク利用による変化に関して解析をすることができなかった。ダルク利用による変化の検証には、今後も引き続き調査を行い、データの収集量を高めることが不可欠である。

F．健康危機情報

無し

G．研究発表

1．論文発表

なし

2．学会発表

なし

表1　調査の実施状況

	Aダルク		Bダルク		Cダルク		Dダルク		Eダルク	
7月	2名	18日	3名	31日	1名	14日				
8月	3名(1名)	20日	5名(2名)	28日	2名(1名)	24日			1名	19日
9月	3名(2名)	23日							1名▲	
10月	3名	22日	3名	22日	3名	21日				
11月			3名	11日						
12月	4名(3名)	16日	5名(3名)	18日	2名	29日	1名	11日		
1月	5名	28日	5名	29日	2名▲					
2月	4名	25日			2名	25日				

注1．表内の人数は各月に調査を実施した人数

注2．( )内の数字はその月に新たに実施した人数

注3．▲印は、実施したが内容が不備であったもの

表２　薬物乱用にかかわる対象の背景

	歳	学歴	乱用開始薬	乱用開始	暴力団関係	非行グループとの付合い	乱用者とのつきあい	補導歴	逮捕歴
A	27 歳	中学卒	有機溶剤	２２歳	乱用前	乱用前	乱用前	なし	なし
B	27 歳	高校卒業	有機溶剤	２１歳	乱用後	なし	乱用後	なし	なし
C	41 歳	中学卒	有機溶剤	１５歳	乱用後	乱用前	乱用前	乱用後	なし
D	25 歳	大学中退	有機溶剤	１７歳	なし	乱用前	なし	乱用後	乱用後
E	31 歳	高校中退	大麻	２６歳	乱用前	乱用前	乱用前	なし	なし
F	38 歳	高校中退	大麻	１２歳	乱用後	乱用前	乱用前	乱用前	乱用後
G	25 歳	高校中退	覚醒剤	１５歳	乱用前	乱用前	なし	なし	なし
H	53 歳	中学卒	アルコール	１２歳	乱用前	なし	乱用前	なし	乱用後
I	43 歳	高校中退	覚醒剤	１３歳	乱用前	乱用前	乱用前	乱用後	乱用後
J	25 歳	高校中退	有機溶剤	１５歳	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前	乱用後
K	26 歳	中学卒	覚醒剤	１３歳	乱用後	乱用前	乱用後	乱用後	乱用後
L	38 歳	中学卒	有機溶剤	１４歳	なし	なし	なし	なし	なし
M	44 歳	中学卒	大麻	１５歳	なし	乱用前	乱用前	なし	乱用前
N	39 歳	高校中退	有機溶剤	１７歳	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前	なし
O	42 歳	中学卒	抗不安剤	１３歳	なし	なし	なし	なし	なし
P	24 歳	大学在学中	有機溶剤	１８歳	なし	乱用前	乱用前	乱用前	なし
Q		高校卒業	睡眠薬	１８歳	なし	乱用前	乱用後	乱用前	なし
R	19 歳	高校中退	有機溶剤	１５歳	なし	なし	なし	なし	乱用前
S	29 歳	専門学校卒業	大麻	１９歳	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前
T	46 歳	高校中退	有機溶剤	２３歳	なし	乱用前	乱用前	乱用前	乱用後
U	21 歳	高校中退	有機溶剤	１４歳	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前
V	35 歳	高校中退	覚醒剤	１７歳	なし	なし	なし	乱用前	乱用後
W	31 歳	大学中退	睡眠薬	２０歳	なし	なし	なし	乱用後	乱用後
X	30 歳	専門中退	アルコール	２４歳	乱用後	乱用前	乱用前	乱用前	乱用前
Y	28 歳	高校卒業	有機溶剤	１３歳	乱用後	乱用後	乱用前	乱用後	乱用後

表3　　**乱用薬物と初回使用年齢**

対象	歳	覚醒剤	有機溶剤	睡眠薬	抗不安薬	鎮痛薬	鎮咳薬	大麻	コカイン	MDMA	きのこ	アルコール	その他
A	27	22						23	22				
B	27	21											
C	41	24	15					32					
D	25	19	17					20	19	24	19		
E	31		26	26	26								
F	25	17	17									12	25
G	38	25	15					16				15	
H	53	27	16		43							12	
I	43	32	13				19	19					
J	25	19	16					15	19	17	16		16
K	26	18	13	25	26			18	18				
L	38	16	14					23					
M	44	20	15					20				20	
N	39	22	17					20				30	
O	42	20	13	38	13	42						41	
P	24	21		22	22			18	21	20	20	19	24
Q		18		25				18				18	
R	19	17	15					17		17		16	
S	29	20						19					
T	46				36							23	
U	21		14	16				18				6	
V	35	18	17	18				17	28	30	27	16	
W	31	27		21	21	21		20		28		20	28
X	30	24		29		29						15	
Y	28	15	14	20	25		20	15	19	17	18	13	21

注1.　表中「きのこ」はマジックマッシュルームである。

注2.　表中の網掛の箇所は乱用開始の薬物と年齢である。

表4　ダルク利用者の利用状況

注1：＊はダルク同様に12ステッププログラムを使用するアルコール依存症の回復施設マックを指す。

	歳	実施	生活費	初回調査時断薬期間	入院回数	過去のダルク利用回数	滞在期間	2月現在	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
A	27歳	8月20日	親	1ヶ月	0	0	1ヶ月	退所後不明							
B	27歳	7月18日	親	2年半(1年8ヶ月拘束)	0	0	7ヶ月	入寮中							
C	41歳	9月23日	生活保護	4年(2年10ヶ月)	2	2	5ヵ月	入寮中							
D	25歳	9月23日	親	6ヶ月(拘束1ヶ月)	1	1	5ヵ月	入寮中							
E	31歳	12月16日	親	1ヶ月	0	0	2ヶ月	入寮中							
F	38歳	7月18	生活保護	一週間	2	0	2ヶ月	退所後不明							
G	25歳	12月18日	生活保護	1ヶ月	5	4	2ヶ月	退所後不明							
H	53歳	7月31日	生活保護	1,5ヶ月	9	2＊	7ヶ月	入寮中							
I	43歳	8月28日	生活保護	4ヶ月(拘束2ヶ月)	2	3	6ヵ月	入寮中							
J	25歳	8月28日	生活保護	1ヶ月	2	7	1ヶ月	退所後不明							
K	26歳	7月31日	生活保護	1月半	2	0	5ヶ月	退所後不明							
L	38歳	12月18日	生活保護	2年(入院3箇月)	1	0	2ヶ月	入寮中							
M	44歳	12月18日	生活保護	4年(うち拘束3年)	1	0	2ヶ月	入寮中							
N	39歳	12月18日	生活保護	2, 5ヶ月	2	2	2ヶ月	入寮中							
O	42歳	7月31日	生活保護	1箇月	11	4	2ヶ月	退所後勾留中							
P	24歳	8月24日	親	半月	0	0	6ヶ月	入寮中							
Q		7月14日	親	14日	0	1	1ヶ月	退所後不明							
R	19歳	8月24日	親	6ヶ月	0	0	不明	1ヶ月							
S	29歳	12月29日	親	1ヶ月	0	0	1ヶ月	入寮中							
T	46歳	12月29日	生活保護	?	1	0	1ヶ月	入寮中							
U	21歳	10月21日	親	1ヶ月	0	0	1ヶ月	退所後不明							
V	35歳	10月21日	親	1ヶ月	0	0	4ヶ月	入寮中							
W	31歳	10月21日	親	なし	0	0	1ヶ月	退所後不明							
X	30歳	12月3日	親	36箇月(拘束34ヶ月)	2	0	3ヶ月	入寮中							
Y	28歳	8月19日	生活保護	16日	0	5	5ヵ月	退所後NA							

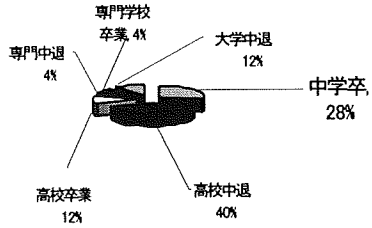


図1　最終学歴

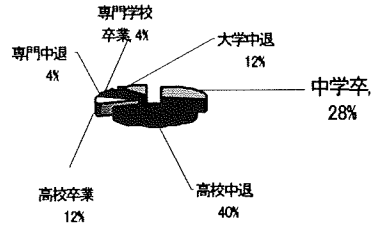


図2 暴力団との関係

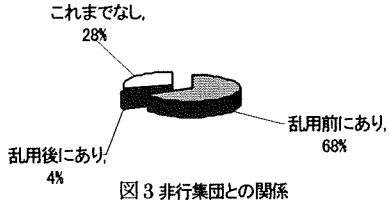


図3 非行集団との関係

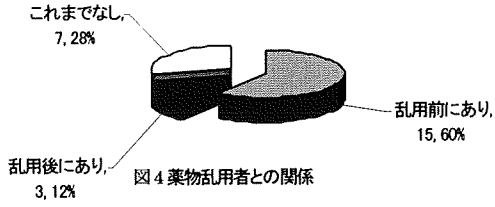


図4 薬物乱用者との関係

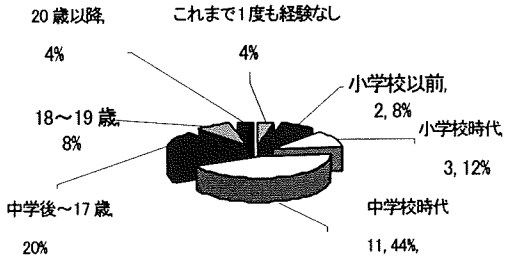


図5 初めて飲酒した年齢

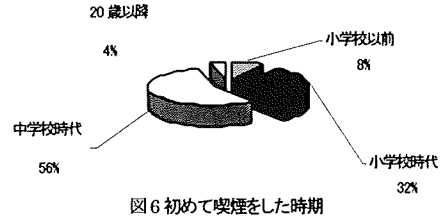


図6 初めて喫煙をした時期

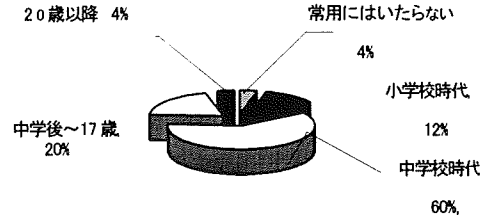


図7 煙草の常用の時期

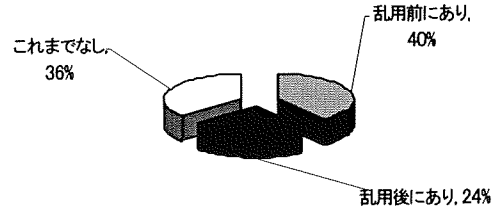


図8 補導暦

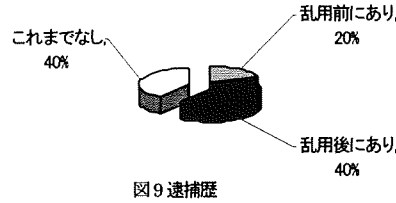


図9 逮捕歴

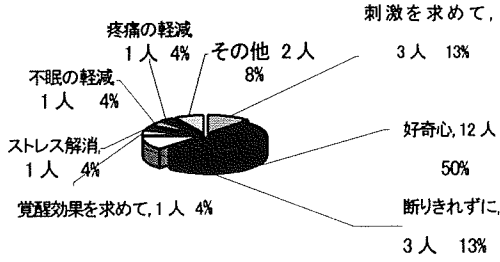
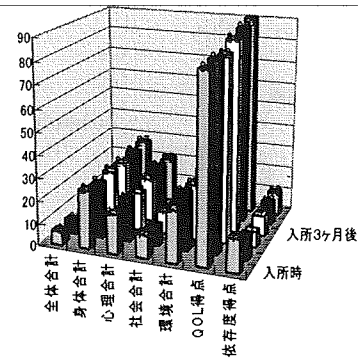
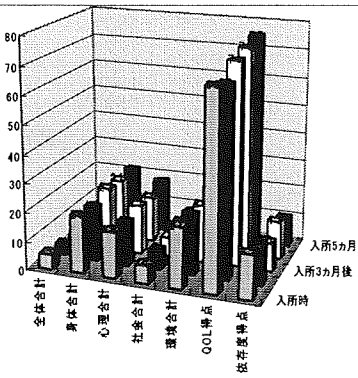


図10 乱用の動機



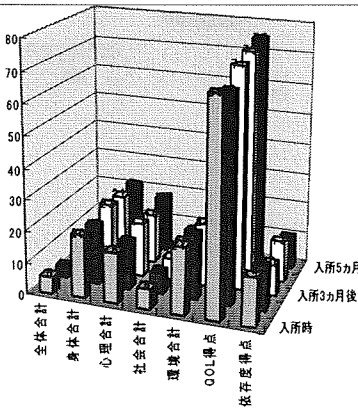
	全体合計	身体合計	心理合計	社会合計	環境合計	QOL得点	依存度得点
入所時	6	26	17	10	23	82	14
入所1ヶ月後	6	24	19	9	25	83	9
入所2ヶ月後	6	25	17	10	24	82	7
入所3ヶ月後	6	25	19	9	27	86	9
入所5ヶ月後	7	26	20	9	26	88	10
入所6ヶ月後	6	27	20	9	28	90	10

図11　対象A



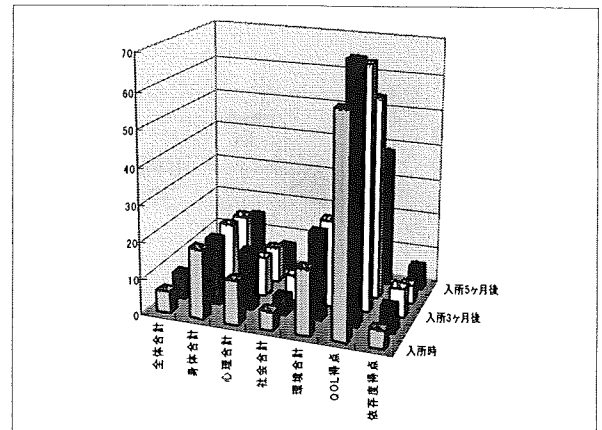
	全体合計	身体合計	心理合計	社会合計	環境合計	QOL得点	依存度得点
入所時	5	20	16	6	21	68	15
入所2ヶ月後	4	19	15	7	21	66	14
入所3ヶ月後	5	22	17	7	20	71	10
入所4ヶ月後	6	21	16	8	22	73	13
入所5ヶ月後	4	21	18	8	24	75	10

図12　対象B



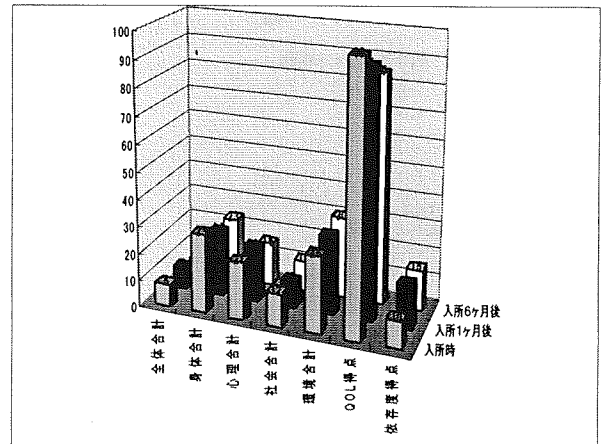
	全体合計	身体合計	心理合計	社会合計	環境合計	QOL得点	依存度得点
入所時	5	20	16	6	21	68	15
入所2ヶ月後	4	19	15	7	21	66	14
入所3ヶ月後	5	22	17	7	20	71	10
入所4ヶ月後	6	21	16	8	22	73	13
入所5ヶ月後	4	21	18	8	24	75	10

図13　対象C



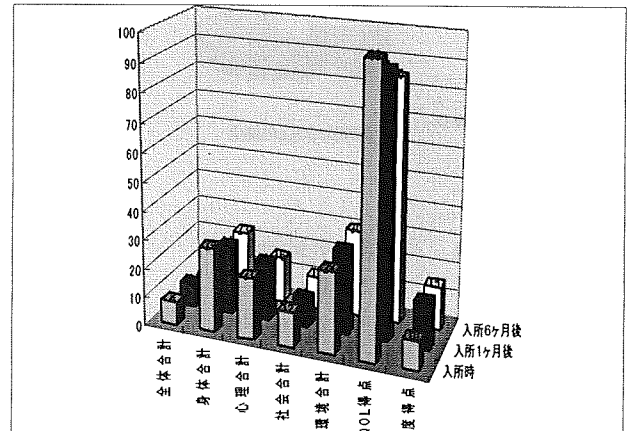
	全体合計	身体合計	心理合計	社会合計	環境合計	QOL得点	依存度得点
入所時	6	19	12	5	18	60	5
入所1ヶ月後	7	18	16	5	24	70	7
入所3ヶ月後	6	19	11	7	24	67	8
入所4ヶ月後	5	18	10	3	20	56	5
入所5ヶ月後	3	15	7	3	10	38	6

図14　対象C



	全体合計	身体合計	心理合計	社会合計	環境合計	QOL得点	依存度得点
入所時	8	29	21	12	28	98	10
入所1ヶ月後	8	24	20	10	29	91	16
入所6ヶ月後	5	23	16	11	30	85	15

図15　対象E



	全体合計	身体合計	心理合計	社会合計	環境合計	QOL得点	依存度得点
入所時	8	29	21	12	28	98	10
入所1ヶ月後	8	24	20	10	29	91	16
入所6ヶ月後	5	23	16	11	30	85	15

図16　対象F

分担研究報告書
(2－3)

平成17年度厚生労働科学研究費補助金
（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）
分 担 研 究 報 告 書

民間治療施設利用者の予後についての研究（2）
－沖縄GAIA利用者の回復過程とその予後に関する研究－

分担研究者　近藤あゆみ　国立精神・神経センター精神保健研究所薬物依存研究部流動研究員
研究協力者　加藤　力　特定非営利活動法人セルフ・サポート研究所
鈴木　文一　特定非営利活動法人セルフ・サポート研究所　GAIA

研究要旨　薬物依存症者の長期的回復を支える中間施設の効果評価を行うとともに、これまで十分明らかにされていないわが国における薬物依存症者の予後を明らかにすることを目的に調査研究を実施した。調査対象は、民間の依存症リハビリテーション施設のひとつである沖縄GAIAである。平成17年 8月より調査を開始し、本年度の調査対象者は、調査開始時期に既に施設に入寮していた者（9名）、調査開始後入寮してきた者（8名）の17名であったが、1名のみ調査同意が得られなかったため、計16名の入寮中および退寮後の追跡調査となった。また、期間内の退寮者は10名であった。沖縄GAIA利用者には、最終学歴が高いこと、薬物使用の開始が比較的遅いことなどの特徴が認められたが、これらの利用者特性は、利用者の多くが家族から経済的支援を得られる状況にあり、比較的これまでの家族基盤が良好に保たれてきた者が多いことと関連するものと思われる。一方で、これまでの薬物使用期間は決して短いとはいえず、依存症の重症度が低いとはいえない。調査開始後入寮してきた8名について入寮時の状態を評価としては、約9割（87.5%）がM.I.N.I.による「最近1年間の薬物乱用」「最近1年間の薬物依存」の基準を満たしており、「高い自殺の危険性」（25.0%）を有する者も存在したが、その他の精神疾患は認められなかった。入寮時より情報収集が出来ている8名を対象とした入所時の心理状態は、POMS評価によると抑うつ、混乱、不安緊張が顕著に高く、SUBI評価によると、陽性感情よりも陰性感情が顕著に低かった。入寮0-3ヶ月または3-6ヶ月時点の情報収集ができている9名について、入寮中の生活、薬物再使用の観点から、民間の薬物依存症リハビリテーション施設の有効性評価を行ったところ、施設は、入寮者の回復のための安全な場所の提供や入寮者を自助グループに導入する役割として機能しており、また、規則正しい生活習慣の確立、断薬生活の継続にも役立っていることが示唆された。入寮時および入寮3ヶ月の情報が得られている6名を対象に心的変化を評価した結果、入所時と比較して3ヶ月後にはPOMS、SUBIの得点ともに改善しており、一般平均得点まで近づいていたことから、施設は情動の安定という観点でも有用であることが示された。退寮後0-3ヶ月時点の情報収集ができている8名について、退寮後の生活、心理状態、薬物再使用の観点から、民間の薬物依存症リハビリテーション施設の有効性評価を行ったところ、予後を単純に就業率や薬物再使用という観点からみた場合、退寮3ヶ月時点では就業率、断薬継続率ともに良好といえるが、退寮者のPOMS、SUBI得点は入寮時と同様に低く、一定期間薬物使用が止まっていても、退寮者のその後の社会生活は決して安易なものではないことが推測された。

A．研究目的

薬物依存症は精神医学的問題のみならず、個人の社会的・情緒的・行動的問題と深く関連していることから、その回復は精神科医療の場でのみ完結するものではなく、引き続き行われるべき生活全体の改善および自己の再構築のための場が不可欠である。これらの場が極めて未整備なわが国では、自らも薬物依存症の経験をもつリカバリング・スタッフが主力を担う民間の薬物依存症リハビリテーション施設がその役割の多くを果たし依存症からの回復に貢献しているが、その客観的評価については未だ不十分である。

そこで、薬物依存症リハビリテーション施設の利用者の属性および薬物依存症重症度に関連する

諸領域に関する情報を幅広く収集し、前向きに追跡することで、薬物依存症者の長期的回復を支える中間施設の効果評価を行うとともに、これまで十分明らかにされていないわが国における薬物依存症者の予後を明らかにすることを目的に調査研究を実施した。

B. 研究方法

調査対象となった沖縄GAIAは、NPO法人セルフ・サポート研究所（主に依存症者をもつ家族を対象とした相談機関）の下部組織として位置づけられている民間の依存症リハビリテーション施設である。その他の多くの施設と同様、施設長および職員はリカバリング・スタッフで占められているが、12ステップ・ミーティングや教育プログラムの他に、サーフィン、ダイビング、シュノーケリングなどのアウトドア・スポーツを積極的に取り入れている。また、施設内で解決が難しい個人的な問題については臨床心理士が電話によるカウンセリングで対応している。入寮中の重点目標は断薬生活の継続、身体作りなど目にみえる回復、様々な活動を通して仲間とのコミュニケーション・スキルの育成をはかることなどである。また、社会復帰を重視し、施設周辺で自立生活を目指すメンバーの支援にも力を入れている。

平成17年4月より施設と打ち合わせながら調査デザインおよび調査項目を選定し、同年8月より調査を開始した。よって今年度の調査期間は平成17年8月より平成18年3月10日までの約7ヶ月間である。調査対象者は、調査開始時期に既に施設に入寮していた者（9名）、調査開始後入寮してきた者（8名）の17名であったが、1名のみ調査同意が得られなかったため、計16名の入寮中および退寮後の追跡調査となった。また、期間内の退寮者は10名であった。

入所時の情報収集は、インテイク面接および自記式調査票により行った。入所時のインテイク面接は、NPO法人セルフ・サポート研究所または沖縄GAIAにおいて、筆者またはリカバリング・スタッフ1名が実施した。インテイク面接での調査項目は、施設利用者の属性、入寮中のプログラムへの取り組み、生活規則性、薬物使用歴などであるが、同時に精神科疾患簡易構造化面接法M.I.N.I.(Mini-International Neuropsychiatric Interview) 1）も実施し、主要な精神疾患を評価した。

更に、入寮時の心理状態の把握には、日本語版POMS（Profile of Mood States）2）および日本語版SUBI（The Subjective Well-being Inventory）3)を用いた。POMSは、被験者がおかれた条件により変化する一時的な気分・感情を評価する全65項目の自記式尺度で、不安・緊張、抑うつ、怒り･敵意、活気、疲労、混乱の6つの気分を同時に測定できることが特徴である。SUBIは、WHOによる主観的幸福感を総合的に評価するための全40項目の自記式尺度で、主観的幸福感を陽性感情・陰性感情の両側面から評価できるという特徴を有する。また、陽性・陰性感情とは別に、満足感、達成感、自信、至福感、近親者の支え、社会的な支え、家族との関係、精神的なコントロール感、身体的不健康感、社会的なつながりの不足、人生に対する失望感という11の下位尺度ごとの評価が可能である。

入寮3ヶ月、6ヶ月、9ヶ月、12ヶ月、退寮時、退寮3ヶ月、6ヶ月の追跡調査は、入寮時または退寮後の生活および薬物使用を評価する自記式調査票とPOMS、SUBIを、施設または自宅に郵送する方法で行った。全ての時点の調査時期は、前後1ヶ月以内と定めた。

データ解析にはSPSS for Windows 11.0.1Jを用いた。尚、調査1年目の本年度は対象者数が不十分であることから統計検定は行わず、傾向をみるだけにとどめた。

C. 研究結果

1）情報収集状況

これまでの情報収集率を表1に示す。調査対象となった17名のうち、1名（No.4）は調査同意が得られなかったが、その他16名については、13名が全ての時点での情報収集ができており、情報収集状況は概ね良好である。

2）対象者の属性

対象者の入寮時年齢、最終学歴、現在の配偶関係および離婚歴を表2に示す。入寮時の平均年齢は29.4才（SD=7.2）で、二十代後半から三十代前半の利用者が多く、最終学歴は高等学校（40.0%）が最も多かった。ほとんどの者（93.3%）が未婚であった。

3）これまでの就業状況および資格の有無

これまでの就業状況については、6ヶ月以上継続して勤務した職業全てについて、その期間と職種をたずねたところ、就業期間平均は75.8ヶ月（SD=62.1）であった。

資格については、約9割（86.7%）が普通自動車免許を有していた他、約3割（26.7%）が調理師、自動車整備士など就業につながる資格を有していた（表3）。

4）薬物使用に関連する人間関係の有無

暴力団員との関係は「これまでになし」の回答が多かったが（60.0%）、非行グループとの関係（73.4%）や薬物乱用者との関係（100.0%）をもつ者が多く、またその関係は主に本人の薬物使用に先立って始まっていた（表4）。

5）補導および逮捕歴

補導および逮捕歴を表5に示す。約7割（66.7%）が過去に逮捕歴を有しており、主に薬物乱用後に逮捕を経験していた。

6）これまでの飲酒および喫煙

初飲酒、アルコールの常用、初喫煙およびタバコの常用開始時期についてたずねた結果を表6に示す。アルコールの常用は高校低学年から始まるものが多く（40.0%）、タバコの常用は中学校時代に始まるものが多かった（53.3%）。

7）薬物使用歴

これまでに使用した薬物について、経験の有無と使用開始年齢、常用月数（週3回程度以上の使用）をたずねた結果を表7-1に示す。経験が多かったのは、覚せい剤（86.7%）、大麻（80.0%）、MDMA（66.7%）、有機溶剤（53.3%）、睡眠薬（53.3%）などであった。

使用開始平均年齢は、有機溶剤（16.1才）、大麻（17.2才）が低かった。平均常用月数が長かったのは鎮咳薬（70.7ヶ月）、大麻（56.9ヶ月）、有機溶剤（50.7ヶ月）などであった。

初使用薬物については表7-2に示す。初使用薬物で最も多かったのは大麻（46.7%）で、有機溶剤（40.0%）が続いていた。

使用動機（複数回答可）は「好奇心」（93.3%）が最も多く、「刺激を求めて」（53.3%）、「ストレス解消」（33.3%）と続いていた。

使用のきっかけとなった人物は「同性の友人」（66.7%）が最も多く、約7割を占めていた。

主たる使用薬物については覚せい剤（73.3%）が最も多く、約7割を占めていた（表7-3）。

最近1年間の入手経路は、密売人（53.3%）との回答が約半数を占めていた。

薬物使用開始平均年齢および使用期間を表7-4に示す。使用開始平均年齢は18.0才（SD=4.3）で、十代後半に開始する者が多く、平均使用年数は11.1年（SD=6.6）であった。

8）精神病エピソードの既往および発症年齢

約9割（86.7%）がこれまでに精神病エピソードの既往があり、そのほとんど（92.4%）は30才以前の発症であった（表8）。

9）薬物依存症に関する治療歴

精神科治療歴を有する者は、通院（40.0%）、入院（60.0%）ともに多かった一方で、依存症リハビリテーション施設利用経験がある者は通所（20.0%）、入所（13.3%）ともに少なく、今回の入寮が初めてである者が多かった（表9）。

10）依存症その他の精神疾患の有無

調査開始後入寮してきた8名については、入寮時に精神科疾患簡易構造化面接法M.I.N.I.を実施し、主要な精神疾患を評価した。約9割（87.5%）が「最近1年間の薬物乱用」「最近1年間の薬物依存」の基準を満たしており、また、「最近1年間のアルコール乱用」（25.0%）、「最近1年間のアルコール乱用」（12.5%）の基準を満たす者、「高い自殺の危険性」（25.0%）を満たす者が存在したが、その他の精神疾患は認められなかった（表10）。

11）入寮時の心理状態

上記と同様の8名について、POMSとSUBIを用いて心理状態の評価を行い、一般男性の平均得点と比較した結果を表11に示す。POMSでは、一般男性と比較して対象者は抑うつ、混乱、不安緊張の得点が高い傾向にあった。また、SUBIによる比較では、陰性感情が顕著に低い傾向が認められた。

12）入寮中の生活状況

入寮者の多くは施設内の生活を「有意義に過ごせている」と感じていた（表12-1）。

また、生活の規則性については起床や食事など概ね良好に保たれていたが、整理整頓や計画的な時間の使用などは十分にできていないと感じる者も多かった。

自助グループへは全員一定頻度を保って参加していた。

飲酒については、6-7割が「まったく飲んでいない」と回答していたが、入寮中に飲酒経験がある者もあった。

「困ったときや悩み事があるとき相談できる人」としては、「共に依存症からの回復を目指す仲間」と答える者が多かった（表12-2）。薬物使用につながる人との接触や、そのような場所に行くことは少なかったが、情報については「時々見聞きする」と回答するものが一定割合存在した。

調査開始後入寮してきた8名については、これまでのところ、入寮中の薬物再使用は認められていない。

13）入寮時から入寮3ヶ月までの心理状態の変化

入寮時から経時的に追跡できている8名のうち、入寮3ヶ月時の情報が得られている6名のPOMSおよびSUBI得点の変化を表13に示す。入寮時高かった抑うつ、混乱、緊張不安は入寮3ヶ月時点で概ね改善し、顕著に低かったSUBIの陰性感情得点も多少改善が認められたが、一般人口平均に至るほどではなかった。

14）退寮0-3ヶ月の生活状況

退寮3ヶ月時点の情報収集が得られている8名の生活状況を表14-1,2に示す。多くが賃貸住宅で独居生活をしており、家族と同居する者は１名のみであった（表14-1）。

生活の規則性については入寮者の回答と比較して大差なかったが、若干の乱れがみられた。

自助グループへの参加は「まったく参加していない」との回答が37.5%であり、入寮者と比較して参加率の低下がみられた。

飲酒については大半の者（75.0%%）が習慣的に飲酒していた。

最近3ヶ月間の主な勤務形態は、常勤職50%、非常勤職25%、無職25%であった（表14-2）。

主な生活費の出所については、約6割（62.5%）が「自分で賄っている」、約4割（37.5%）が「親の補助」と回答していた。

薬物使用につながる人との接触や、そのような場所に行くことは少なかったが、情報については、入寮者の回答と類似して「時々見聞きする」と回答するものが一定割合存在した。

15）退寮3ヶ月時点の心理状態

退寮3ヶ月時点の情報収集が得られている8名のPOMSおよびSUBI得点を一般男性得点と比較した結果を表15に示す。POMSによる評価では、対象者は一般男性と比較して、抑うつ、怒り敵意、混乱の得点が顕著に高かった。SUBIでは陰性感情の低下が顕著であった。

16）退寮者の入寮中および退寮後3ヶ月の薬物使用

調査開始後退寮した10名について、入寮中および退寮後3ヶ月の薬物使用の観点から予後を評価した結果を表16に示す。

調査の同意が得られている9名のうち入寮中の再使用は1名（11.1%）、退寮後3ヶ月時点までの再使用は1名（11.1%）であったが、スタッフの評価によると退寮後再使用が強く疑われる者が他に1名あったことから、その者を再使用に含めると再使用率は22.2%になる。また、調査の同意が得られていない1名を再使用に含め計算した場合は、10名中3名の再使用となり再使用率は30.0%となる。

D. 考察

１）対象者の特性

沖縄GAIA利用者には、依存症者全体と比較した場合、いくつかの特徴がみられると思われた。

まず、精神科医療施設の薬物関連精神疾患患者を対象とした過去の調査結果4)と比較して、最終学歴が高いことが挙げられる。また、依存症リハビリテーション施設使用者を対象とした調査結果5)と比較すると、薬物使用の開始が比較的遅い傾向にあるが、一方で、精神科医療施設の薬物関連精神疾患患者を対象とした過去の調査結果4)の「主たる使用薬物別にみた薬物初回使用年齢」を、本調査の「これまでの使用薬物の使用開始年齢」と比較すると大差ないことがわかる。これらの比較から、この特性は、対象者の初使用薬物において、使用開始平均年齢が他の薬物と比較して低い有機溶剤が低率であることに影響を受けているかもしれない。また、これらの利用者特性は、利用

者の多くが家族から経済的支援を得られる状況にあり、比較的これまでの家族基盤が良好に保たれてきた者が多いことと関連するものと思われる。

一方で、これまでの薬物使用期間は決して短いとはいえず、依存症の重症度が低いとはいえない。

2）対象者の入寮時の状態

調査開始後入寮してきた8名について入寮時の状態を評価としては、約9割（87.5%）がM.I.N.I.による「最近1年間の薬物乱用」「最近1年間の薬物依存」の基準を満たしており、「高い自殺の危険性」（25.0%）を有する者も存在したが、その他の精神疾患は認められなかった。

入寮時のPOMS評価によると抑うつ、混乱、不安緊張が顕著に高かったが、ダルク利用者を対象とした過去の研究6)においても同様の傾向が認められていることから、これらは薬物依存症者一般の特性と捉えることができよう。

SUBI評価によると、一般人口と比較して、陽性感情よりも陰性感情が顕著に低かったが、陽性感情には全般的幸福感を評価する項目が多く含まれているのに対し、陰性感情には心身の不調に関する項目が多く含まれており、陰性感情のほうが障害の影響を直接的に受けると予測されることから、結果は妥当なものと思われる。

3）入寮生活からみた民間の薬物依存症リハビリテーション施設の有効性評価

入寮0-3ヶ月または3-6ヶ月時点の情報収集ができている9名について、入寮中の生活、心的変化、薬物再使用の観点から、民間の薬物依存症リハビリテーション施設の有効性評価を行った。

入寮中の生活の規則性については、0-3ヶ月、3-6ヶ月ともに概ね良好に保たれていたが、「身の回りの掃除や片づけをこまめにする」「計画的に時間を使い毎日を過ごしている」については、入寮3-6ヶ月の回答では十分にできていない者の割合が入寮0-3ヶ月の者の回答と比較して高くなっており、入寮生活の慣れに伴う変化とも思われる。また、ほとんどの者は再使用につながる人間関係や環境から遮断されていることから、施設が回復を目指すための安全な場所として機能していることがわかるが、「クスリが欲しくなるような情報を見聞きする」については「ときどきある」との回答も多く、このことは施設にインターネットを導入していることが関係しているものと思われる。また、多くの入寮者は週に数回の頻度でNAに参加できており、施設が自助グループへの導入役割を果たしていることが示されたが、入寮中の飲酒は禁じられているにも関わらず、飲酒経験がある者が一定数存在し、ルールが徹底できていないことがうかがえる。

入寮者の心的変化については、入寮時と入寮3ヶ月両時点のPOMSおよびSUBI得点が得られている6名について評価したところ、POMSについては、入寮時に顕著に高かった抑うつ、混乱、不安緊張の平均得点が3ヶ月時点で概ね一般人口平均まで改善し、また、SUBIについては、入寮時に顕著に高かった陰性症状が多少改善していたが、3ヶ月時点ではまだ一般人口平均に近づいてはいなかった。

入寮中の薬物使用については、調査開始後退寮した10名について検討した結果、1名に入寮中の再使用が認められた。

以上、課題は残るものの、施設は、入寮者の回復のための安全な場所の提供や入寮者を自助グループに導入する役割として機能しており、また、規則正しい生活習慣の確立、情動の安定、断薬生活の継続にも役立っていることが示唆された。

4）退寮者の予後からみた民間の薬物依存症リハビリテーション施設の有効性評価

退寮後0-3ヶ月時点の情報収集ができている8名について、退寮後の生活、心理状態、薬物再使用の観点から、民間の薬物依存症リハビリテーション施設の有効性評価を行った。

退寮3ヶ月時点の情報収集が得られている8名の生活状況の把握から、約4割は親の援助を必要としてはいるものの、常勤・非常勤合わせて75.0%が就業できていることがわかった。自助グループへの参加率は入寮者と比較して低下しており、また、大半の者が習慣的に飲酒していた。

退寮後の心理状態は、POMS、SUBIとも、入寮時の得点と大差なく、一般男性の平均得点と比較して顕著に低かった。

また、調査開始後退寮した10名について、入寮中の薬物再使用、退寮後3ヶ月までの薬物再使用、就業状況の観点から予後を評価したところ、退寮後3ヶ月時点の断薬継続率は77.8%（調査に同意が得られなかった1名を再使用ありとして含めた場

合は70.0%）であった。

以上、退寮者の予後を単純に就業率や薬物再使用という観点からみた場合、退寮3ヶ月時点では就業率、断薬継続率ともに良好といえる。しかし、退寮者のPOMS、SUBI得点は入寮時と同様に低く、一定期間の薬物使用が止まっていても、退寮後のその後の社会生活は決して安易なものではないことが推測される。また、自助グループへの参加率の低下や日常的な飲酒は、一般的に薬物再使用の可能性を高める要因であると思われることから、施設としてこれらの課題に取り組むことは、退寮者の心的健康度を高めるとともに、良好な長期予後のためにも有益であると思われた。

5）今後の課題

本年度は調査開始1年目であり対象者数が不十分であった。今後継続して調査を行うことで、対象者の入寮中および退寮後の変化および長期予後をより明確に示すよう努めたい。

E. 結論

本調査により、民間の薬物依存症リハビリテーション施設である沖縄GAIAの利用者の特性とその有効性をある程度示すことができた。入寮中および退寮後の利用者の生活状況および断薬継続率から判断して、当施設がある一定層の利用者を対象に効果を上げていることが示唆されたが、このように主な利用者の特性や回復状況を明確に示すことは、回復の場を選択する利用者にとっても非常に重要であると思われた。また、退寮者の不安定な情動や低い主観的幸福感からは薬物依存症者の社会生活復帰の困難さがうかがえ、依存症者への長期的支援、就労の場の整備などの必要性が感じられた。

謝辞

本調査に多大なご協力をいただきましたNPO法人セルフ・サポート研究所ならびに沖縄GAIAの皆さまには心より厚くお礼を申し上げます。

F. 研究発表

なし

G. 参考文献

1）大坪天平，宮岡等，上島国利：M.I.N.I. 精神疾患簡易構造化面接法　改訂版，株式会社星和書店，2003

2）横山和仁，荒記俊一：日本版POMS手引，株式会社金子書房，1994

3）大野裕，吉村公雄：WHO SUBI(The Subjective Well-being Inventory)手引き，株式会社金子書房，2001

4）尾崎茂：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査，平成14年度厚生労働科学研究費補助金(医薬安全総合研究事業)薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究　研究報告書，2003

5）近藤恒夫：ダルク利用経験者の回復に関する調査研究，平成11年度厚生科学研究補助金（医薬安全総合研究事業）薬物依存・中毒者のアフターケアに関する研究　研究報告書，2000

6）森田展彰：自助グループの実態に関する研究，平成14年度厚生労働科学研究費補助金（医薬安全総合研究事業）薬物乱用・依存等の実態把握に関する研究及び社会経済的損失に関する研究　研究報告書，2003

表1. 情報収集状況

ID	入寮時	入寮3ヶ月	入寮6ヶ月	入寮9ヶ月	退寮時	退寮3ヶ月	退寮6ヶ月	収集率
No.1	▲				●	●	●	100.0
No.2	▲				●	●		100.0
No.3	▲				×	●		66.6
No.4	×				×	×	×	0.0
No.5	×				×	●		33.3
No.6	▲				●	●		100.0
No.7	▲		●	●	●			100.0
No.8	▲				●	●		100.0
No.9	▲	●	●					100.0
No.10	●	●	●					100.0
No.11	●	●	●					100.0
No.12	●				×	×		33.3
No.13	●	●			●	●		100.0
No.14	●	●	●					100.0
No.15	●	●						100.0
No.16	●				●	●		100.0
No.17	●	●						100.0

＝調査開始時既にその時点を通過していたため情報収集不可
＝その時点を迎えずに退寮し、退寮後の調査票に切り替えたため調査不要
● ＝情報収集済み
▲ ＝調査開始時既に入寮していたため、属性等不変情報のみさかのぼって収集済み
× ＝情報収集不可

表2. 対象者の属性

		性別		
		男性	女性	合計
		度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
入寮時年齢	20未満	0 (.0)	1 (50.0)	1 (6.7)
	20-24	2 (15.4)	0 (.0)	2 (13.3)
	25-29	4 (30.8)	1 (50.0)	5 (33.3)
	30-34	4 (30.8)	0 (.0)	4 (26.7)
	35-39	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	40以上	2 (15.4)	0 (.0)	2 (13.3)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
最終学歴	中学校	3 (23.1)	1 (50.0)	4 (26.7)
	高校	5 (38.5)	1 (50.0)	6 (40.0)
	専門学校	3 (23.1)	0 (.0)	3 (20.0)
	短大	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	大学	2 (15.4)	0 (.0)	2 (13.3)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
現在の配偶関係	未婚	12 (92.3)	2 (100.0)	14 (93.3)
	同棲	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	内縁	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	既婚	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	別居	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	離婚	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	死別	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	再婚	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	その他	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
離婚歴	あり	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	なし	12 (92.3)	2 (100.0)	14 (93.3)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)

表3. 対象者の運転免許およびその他専門資格の有無

		性別		
		男性	女性	合計
		度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
運転免許	普通	12 (92.3)	1 (50.0)	13 (86.7)
	二輪	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	原付	0 (.0)	1 (50.0)	1 (6.7)
	なし	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
専門資格	あり	4 (30.8)	0 (.0)	4 (26.7)
	なし	9 (69.2)	2 (100.0)	11 (73.3)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)

表4. 薬物使用に関連するこれまでの人間関係

		性別		
		男性	女性	合計
		度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
暴力団員との関係	乱用前にあり	2 (15.4)	1 (50.0)	3 (20.0)
	乱用後にあり	2 (15.4)	1 (50.0)	3 (20.0)
	これまでなし	9 (69.2)	0 (.0)	9 (60.0)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
非行グループとの関係	乱用前にあり	8 (61.5)	2 (100.0)	10 (66.7)
	乱用後にあり	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	これまでなし	4 (30.8)	0 (.0)	4 (26.7)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
薬物乱用者との関係	乱用前にあり	11 (84.6)	2 (100.0)	13 (86.7)
	乱用後にあり	2 (15.4)	0 (.0)	2 (13.3)
	これまでなし	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)

表5. 補導および逮捕歴

		性別		
		男性	女性	合計
		度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
補導歴	乱用前にあり	4 (30.8)	2 (100.0)	6 (40.0)
	乱用後にあり	2 (15.4)	0 (.0)	2 (13.3)
	これまでなし	7 (53.8)	0 (.0)	7 (46.7)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
逮捕歴	乱用前にあり	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	乱用後にあり	8 (61.5)	1 (50.0)	9 (60.0)
	これまでなし	4 (30.8)	1 (50.0)	5 (33.3)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)

表6. これまでの飲酒および喫煙

		性別		
		男性	女性	合計
		度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
初飲酒経験	1度も経験なし	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
(いたずらを含む)	小学校以前	1 (7.7)	2 (100.0)	3 (20.0)
	小学校時代	6 (46.2)	0 (.0)	6 (40.0)
	中学校時代	3 (23.1)	0 (.0)	3 (20.0)
	中学後～17才	3 (23.1)	0 (.0)	3 (20.0)
	18～19才	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	20才以降	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
アルコール常用	1度も経験なし	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
(月1回程度以上)	常用には至らない	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	小学校以前	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	小学校時代	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	中学校時代	2 (15.4)	1 (50.0)	3 (20.0)
	中学後～17才	5 (38.5)	1 (50.0)	6 (40.0)
	18～19才	3 (23.1)	0 (.0)	3 (20.0)
	20才以降	3 (23.1)	0 (.0)	3 (20.0)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
初喫煙経験	1度も経験なし	2 (15.4)	0 (.0)	2 (13.3)
(いたずらを含む)	小学校以前	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	小学校時代	2 (15.4)	1 (50.0)	3 (20.0)
	中学校時代	7 (53.8)	1 (50.0)	8 (53.3)
	中学後～17才	2 (15.4)	0 (.0)	2 (13.3)
	18～19才	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	20才以降	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
タバコ常用	1度も経験なし	2 (15.4)	0 (.0)	2 (13.3)
(週1回程度以上)	常用には至らない	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	小学校以前	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	小学校時代	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	中学校時代	7 (53.8)	1 (50.0)	8 (53.3)
	中学後～17才	4 (30.8)	0 (.0)	4 (26.7)
	18～19才	0 (.0)	1 (50.0)	1 (6.7)
	20才以降	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)

表7-1. これまでの使用薬物について

		度数 (%)	使用開始平均年齢 (SD)	平均常用月数 [週3程度] (SD)
覚せい剤	経験あり	13 (86.7)	20.9 (5.1)	38.8 (24.0)
	経験なし	2 (13.3)		
	合計	15 (100.0)		
有機溶剤	経験あり	8 (53.3)	16.1 (1.6)	50.7 (40.9)
	経験なし	7 (46.7)		
	合計	15 (100.0)		
睡眠薬	経験あり	8 (53.3)	20.4 (3.2)	10.0 (7.7)
	経験なし	7 (46.7)		
	合計	15 (100.0)		
抗不安薬	経験あり	5 (33.3)	24.0 (4.8)	7.2 (10.7)
	経験なし	10 (66.7)		
	合計	15 (100.0)		
鎮痛薬	経験あり	2 (13.3)	25.0 (0.0)	0.5 (0.7)
	経験なし	13 (86.7)		
	合計	15 (100.0)		
鎮咳薬	経験あり	4 (26.7)	22.8 (5.6)	70.7 (60.6)
	経験なし	11 (73.3)		
	合計	15 (100.0)		
大麻	経験あり	12 (80.0)	17.2 (1.9)	56.9 (46.8)
	経験なし	3 (20.0)		
	合計	15 (100.0)		
コカイン	経験あり	7 (46.7)	21.3 (3.8)	4.7 (6.4)
	経験なし	8 (53.3)		
	合計	15 (100.0)		
ヘロイン	経験あり	3 (20.0)	22.3 (6.0)	0
	経験なし	12 (80.0)		
	合計	15 (100.0)		
MDMA	経験あり	10 (66.7)	21.9 (4.3)	4.3 (6.7)
	経験なし	5 (33.3)		
	合計	15 (100.0)		
マジックマッシュルーム	経験あり	5 (33.3)	20.2 (2.4)	0
	経験なし	10 (66.7)		
	合計	15 (100.0)		
その他	経験あり	9 (60.0)	18.7 (2.5)	0.2 (0.4)
	経験なし	6 (40.0)		
	合計	15 (100.0)		

表7-2. 初使用薬物について

		性別		
		男性	女性	合計
		度数 (%)	度数 (%)	度数 (%)
初使用薬物	覚せい剤	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	有機溶剤	5 (38.5)	1 (50.0)	6 (40.0)
	睡眠薬	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	抗不安薬	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	鎮痛薬	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	鎮咳薬	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	大麻	6 (46.2)	1 (50.0)	7 (46.7)
	コカイン	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	ヘロイン	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	MDMA	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	マジックマッシュルーム	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	その他	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
使用動機 (複数回答可)	刺激を求めて	7 (53.8)	1 (50.0)	8 (53.3)
	好奇心	13 (100.0)	1 (50.0)	14 (93.3)
	自暴自棄になって	1 (7.7)	1 (50.0)	2 (13.3)
	断り切れずに	2 (15.4)	1 (50.0)	3 (20.0)
	覚醒効果を求めて	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	疲労の除去	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	性的効果を求めて	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	ストレス解消	4 (30.8)	1 (50.0)	5 (33.3)
	不安の軽減	1 (7.7)	1 (50.0)	2 (13.3)
	不眠の軽減	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	疼痛の軽減	0 (.0)	1 (50.0)	1 (6.7)
	咳嗽の軽減	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	その他	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)
きっかけとなった人物	なし(自発的使用)	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	配偶者	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	同棲中の相手	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	恋人・愛人	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	同性の友人	9 (69.2)	1 (50.0)	10 (66.7)
	異性の友人	0 (.0)	1 (50.0)	1 (6.7)
	知人	2 (15.4)	0 (.0)	2 (13.3)
	医師	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	薬剤師	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	親	1 (7.7)	0 (.0)	1 (6.7)
	同胞	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	密売人	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	その他	0 (.0)	0 (.0)	0 (.0)
	合計	13 (100.0)	2 (100.0)	15 (100.0)